

特集

ケニアの大統領選あれこれ

- 投票前後を振り返って -

在ケニア JICA 専門家 杉山隆彦

2002年12月27日、24年間続いたモイ(Moi)政権の終焉を告げる総選挙が実施されました。結果は、予想通りキバキ(Mwai Kibaki)政権の誕生となったわけですが、私自身が間近で選挙を見届けた経験から、選挙前後のケニアの政治と国民の関心を振り返りましょう。

まずこの選挙の意味は、新政権の誕生はもちろん重要なことですが、一つには、ケニアで政権の移譲が、初めて民主的な選挙により平和裡になされたことで、ケニア人の政治的熟成度が国際社会に高く評価されたことにあるでしょう。二つ目には、野党連合の政治的安定性については、多くの不確定要素が残っておりますが、とにかく国内外からケニア人に野党連合はほとんど不可能といわれてきた人々がそれを実現したのですから、その意義は歴史的な出来事といってよいでしょう。そして第三には、国内外から選挙に関し、いろいろ取り沙汰されてきたにもかかわらず、予想以上に平穏かつ公正に行われたことで、国民に大きな自信がついたことでしょう。そしてこの選挙を成功に導いたのは、モイ前大統領の引き際の潔さにあると思います。

1997年2期目の勝利を果たしたモイ大統領は、これが最後の政権になるといつつ、なかなか自身の去就を明確にせず、強権を発動し居座るのではないかと、あるいは傀儡を立て院政を敷くのではないかと、国民を苛立たせてきました。しかし、2002年に入ると各所で引退を表明するようになり、ブッシュ大統領との間で何が話されたか分かりませんが、12月の訪米で政権の譲渡の意志は

決定的になったと思われます。1978年初代大統領ケニヤッタの死後、副大統領から暫定大統領となったモイ大統領は、ケニヤッタ側近筋からは雲が流れるごとく90日後の選挙では去る人物という評価でした。しかし、79年の選挙で勝利を収め、長期政権がスタートしたのです。その裏には当時の東西冷戦の狭間で、ケニアの政治的安定を望む西側の強い支援があってモイ政権は安泰を得てきたといえます。特にモイ政権の独裁強化への転換点は、1982年7月31日から8月1日にかけてのクーデター未遂事件です。この難事を乗り切ったモイ大統領は、その後、ムウケニヤ(Mwakenya)事件にあるような学者や政治家の反対勢力の弾圧に乗り出し、確固たる政治的地盤を固めたといわれています。その後、東側の崩壊で、アフリカにも急速に民主化の波が押し寄せ、1992年には多党制による大統領の任期2期を定めた総選挙が実施され、1997年に勝利を得た後2002年を迎えたのです。

簡単にケニアの選挙制度を紹介しますと、選挙権は18才以上のケニア国籍を有する国民に与えられており、事前に選挙管理委員会に登録し、投票場所を記した選挙人カードを取得します。そのカードの名簿に基づき投票用紙を受け取り投票することになります。選挙は、大統領と国会議員及び地方議会議員の三種類の選挙を同時に行います。これらの投票は、予め決められた政党を代表するシンボルマークにチェックすることにより投票する候補者が決まるようになっております。大統領の場合は8つある州(Province)の内5つの州で

25 パーセント以上の得票率を確保することが必要です。選挙区は 210 あり、人口や地理的状况により投票所の数は一律ではありませんが、今回は 1800 の投票所が設けられたといわれております。開票は、投票締め切り後、その場で行われ、結果を中央へ報告し、最終の集計がなされるという形で行われました。投票及び開票中には各政党を代表する監視員が投票所に配置され、不正防止策が図られました。ケニアの選挙では、とにかく選挙人の多くが非識字者ですので、混乱や不正を避けるためいろいろな配慮を必要としているのです。

今回の選挙では、大統領選には、現政権党の KANU (Kenya African National Union) からは初代大統領の息子のウフル・ケニヤッタ (Uhuru Kenyatta) 氏、NARC (National Rainbow Coalition) からはキバキ氏、Ford (Forum for Restoration of Democracy) -People からはニャチャエ (Simeon Nyachae) 氏、SDP (Social Democratic Party) からはオレンゴ (James Orengo) 氏及び Chama Cha Uma のワウエル・ンゲゼ (Waweru Ngethe) 氏の 5 名が名乗り選挙戦が行われました。オレンゴ候補やンゲゼ候補は、国会議員選挙で敗退するということになり、大統領選挙戦途中で大統領候補の資格を喪失するというようなことになりました。

12 月 29 日未明、NARC の大勝はほぼ確定し、24 年間続いたモイ大統領による KANU 政権の終焉を告げました。大勝の主因は、国民がとにかく KANU 政府に代わる新しい政府を求めたことによると言えます。選挙活動中各政党は、それぞれ公約を掲げましたが、目標値に差があるものの政策的に大きな相違のない公約であり、国民にとっては、それら公約の実現を期待する一方、KANU に代わる新政府の樹立を望んだと言えます。

12 月 27 日の総選挙はいろいろ懸念された混乱や暴動は少なく、非常に平穏に行われました。国民が、何よりも社会の治安と安定を求めていたことが選挙を平穏に済ますことができた要因でしょう。12 月 29 日、ほぼキバキ候補の圧勝が確定した市内の風景は、KANU 政府の縄縛から解放された喜びを “freedom” を連呼し、歓喜する市民で沸きあがっていました。

投票終了後 28 日の朝には、KANU の副大統領

ムダバディ氏、24 年間モイ大統領に忠誠を尽くしたシャリフ・ナシール氏、等 KANU の大物政治家が続々と落選するというニュースがありました。29 日午後、野党の勝利宣言前に敗北を潔く受け入れたウフル候補を賞賛する声はケニア内外から多く聞かれました。この選挙に対する EU からの選挙監視団やカーター財団から派遣されたカウンダ元ザンビア大統領による今回の選挙評価では、キバキ候補が誉め殺しに会うのではないかといいくらい誉めちぎられました。

12 月 29 日夕方、選挙委員会はキバキ候補の正式勝利を発表し、翌 30 日午前 9 時に大統領就任式を実施すると発表しました。30 日では準備ができるかどうか疑問をもちましたが、土壇場で収支を合わせるのが上手なケニア人ですから、何とか少しの遅れで就任式は行われるであろうと思っていました。しかし、やはりこの短時間で全てを準備するのは無理で、結局午後 2 時ごろに開始され、1 時間後の 3 時に無事大統領の交代が終わりました。40 年の KANU 政権の終焉でした。当日の来賓は、ウガンダのムセベニ大統領、タンザニアのムパカ大統領、ザンビアのムワナワサ大統領と南アのムベキ大統領夫人、ルワンダのマクザ首相でした。式典は、ナイロビ市内のウフル・パークで行われ、当日の参加者は新聞報道によると約 50 万人で、かなり混乱もありましたが、警察等治安関係者の努力で平穏に終了しました。早速キバキ大統領は、国民への初めてのメッセージを読み上げた最後に、「1 月 2 日」を祝日にするという大統領として初めての権力を行使しました。

選挙結果は、大統領選では、キバキ候補が全国で 60 パーセント以上の得票率、また 8 州の内 6 州で KANU に大勝し、国会議員選挙の方は、NARC : 125 議席、KANU : 65 議席、FORD-PEOPLE : 14 議席、SAFINA : 2 議席、SISI KWA SISI : 2 議席、SHIRIKISHO : 2 議席となり、NARC は過半数を大きく上回る結果となりました。この結果を踏まえ、全体で 12 名ある指名議員が、当選議員に比例して各党に割り振りされ、NARC 7 名、KANU 4 名、および FORD-PI 名が指名されます。

1 月 3 日午後、キバキ大統領は記者会見し、新

内閣の顔ぶれを発表しました。当初スリムな政府にするとされており、大臣数が減ると言う予想がありました。結局副大統領を含め 25 名（内女性 3 名）の閣僚を任命し、前政権と大臣数では大きな差はありませんでした。また、女性閣僚の数も当初予想より少なかったとされており。しかし、ジェンダーでは省を新設したことが国民には評価されているようです。しかし、これらの人事は暫定的な移行期のもので、100 日以内に憲法改正を行い本格的な政権造りが行われるであろうといわれています。今回ほとんど手のつけられなかった官僚の人事もその際に行われるであろうといわれています。

第 3 代の大統領に就任したキバキ氏は、1931 年セントラル州ニエリ県オタヤ（Othaya）に生まれ、O-レベルの教育を地元で受け、A-レベルを Thika にあるマンガ高等学校で修了、1951 年マケレレ大学に進学、経済・財政学の学位を取得し、一時同大学で教鞭をとりました。1960 年教職を辞し、KANU の職員となり、1963 年の総選挙に備え、初の立候補で当選しました。1966 年には、商工大臣、1969 年には大蔵大臣、1978 年から 82 年までモイ政権の副大統領兼大蔵大臣、82 年から 88 年まで副大統領兼内務大臣を務めました。

1991 年多党制の選挙を翌年にひかえ、DP（Democratic Party）を設立し、1992 年と 97 年に大統領選に挑戦しましたが、2 度ともモイに敗れました。2002 年 DP は他の野党と連合し、NARC を結成。キバキ氏はその大統領候補に選ばれたのです。モイ前大統領が引退した現在では、キバキ氏は議員暦の一番長い政治家ということになります。

キバキ新政府は、汚職の撲滅、崩壊した経済インフラの修復、保健・教育等社会インフラの修復、失業問題、農業の修復、税金の有効的活用等多くの公約を掲げました。しかし、1 月 6 日からの新学期では、早速、初等教育の無償・義務教育化が実施されたのですが、ナイロビの優秀な公立学校へは 3,000 人の入学希望者が殺到し、現場は大混乱を呈しました。また、保健大臣は、公立病院での未払い治療費回収のための土地登記書の差し押さえ、患者の退院拒否等を禁じました。いずれ、

思わぬ所で混乱が生じると思われます。取り敢えず、新政府は政治家集団として公約を果たさんと努力しておりますが、政府の財布は空っぽです。従って、新政府にとって公約を実施するための現実的戦略の策定が何よりも緊急を要する課題となっています。NARC 政府は 13 の政党からなる大野党連合です。今後この連携が継続されるかどうかを疑問視する見方も多いのです。実際、新政府発足後、早速党内の一部から大臣の割り振りに対する不満の声が出るなど、連立政権の安定化には前途多難のようです。

これまで、一党独裁から民主的政府への移譲が行われたタンザニア、マラウィ、ザンビア等の政権交代に対し国民の期待は非常に大きかったです。しかし、新政府のほとんどは国民の期待に応えることができず、民主化の恩恵が何か？良く理解できないまま現在に至っているケースが少なくありません。ケニアの場合も、今回の新政府に対する国民の期待は過大といっても過言ではありません。特に経済的向上と汚職・腐敗の浄化に期待しています。しかし、これらの問題は容易に解決し得るものではありません。いずれ国民は期待通りに政治は進まないということが分かるでしょう。しかし、5 年後、10 年後と民主的選挙の経験を経て、国民の政府を選ぶ目も肥えるでしょう。そしてひたすら辛抱強く、選ばれた政府と国民が協調し国造りに努力を続けるなら、必ずケニアにも明るい未来が開かれるであろうことを信じています。その一歩が今回の選挙であったといえます。

筆者プロフィール

- 杉山隆彦（すぎやま たかひこ） -

国際協力事業団（JICA）国際協力専門員（人的資源開発）青年海外協力隊や JICA 専門家として 30 年以上に渡り、ケニア・タンザニアを中心にアフリカ地域の開発に携わる。現在はケニア中等理科教育強化計画のチーフアドバイザーとして、現職教員研修を通じた中等理科教育の改善に取り組んでいる。